

新たな始まり

親鸞聖人750回大遠忌

Vol.49

宗門長期振興計画の現状

『浄土真宗聖典全書』第一巻

「三経七祖篇」の魅力

1 はじめに

浄土真宗本願寺派総合研究所へ聖典編纂におきましては、『浄土真宗聖典全書』全六巻（以下、『聖典全書』）の編纂事業を推進しています。一昨年度三月に刊行した第二巻目の「宗祖篇上」に続き、本年度に第一巻目にあたる「三経七祖篇」の刊行を予定しています。「三

経七祖篇」の特徴については、すでに本誌三月号（二〇一二年）にてご紹介した通りですが、振り返りますと、

① 三部経と七祖聖教の一体化（一冊にまとめる）

② 新たに異訳の大経と小経、略論が編入

③ 最新の評価に基づく善本を選定（資料

性の保持）

④ 読解の便を重視（テキスト性の保持）

⑤ 版面・付録の充実

⑥ 見開き上欄への連絡頁の配備

などが、大きな特徴といえます。今回は、このうちとくに②と④について詳しくご紹介したいと思います。

2 「三経七祖篇」の内容と収録聖教

◆収録聖教の概要

「三経七祖篇」の収録聖教についてあらためて窺ってみますと、「阿弥陀仏のみ教えが説かれた根本聖典の浄土三部経とその異訳の経典、浄土真宗の教義体系を支える七高僧の論釈」がその内容です。まず「浄土三部経」についてみますと、『大無量寿経』はいうまでも



本願寺蔵『顕浄土真実教行証文類』（総序）

なく浄土真宗の根本所依の經典です。親鸞聖人の「教行信証」「教卷」には「それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿経』これなり」（『註釈版聖典』一三五頁）と阿弥陀仏の本願の名号のいわれが説かれていて、この經典の開説が釈尊の本意であることが示されているから「真実の教」であると明らかにされています。また、「教行信証」「化身土巻」には「三経の真実は、選択本願を宗と

するなり」（『註釈版聖典』三九二頁）とあり、顕わに説かれている法義では方便経といわれる「観経」・「小経」も、隠れた面に「大経」と同じ真実の法義が明かされた經典であるとして尊重されています。

また、七高僧の論釈については、「教行信証」「総序」に「ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈に、遇ひがたくしていま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり」（『註釈版聖典』一三二頁）と阿弥陀仏の本願の法義を開顕してくださった方々の教えに遇うことができた慶びを示されており、それは「正信偈」依釈段や「高僧和讃」にくにはつきりと述べられるところです。

◆はじめての収録聖教

阿弥陀仏の本願念仏の教えを説かれた浄土三部経および七高僧の著作はこれまでも『浄土真宗聖典』（原典版・註釈版）、『浄土真宗聖典七祖篇』（原典版・註釈版）

に収録されてきました。しかし、今回の「三経七祖篇」にはこれまでの「浄土真宗聖典」にはなかった聖教を収録しております。その収録聖教をみてみますと、

- ・浄土三部経
- 無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経
- ・異訳大経
- 大阿弥陀経・平等覚経・無量寿如来会・莊嚴経
- ・異訳小経
- 称讚浄土経

・七 祖

- 易行品・十二礼・浄土論・往生論
- 論註・讚阿弥陀仏偈・略論安楽浄土義・安楽集・観経疏・法事讚・観念法門・往生礼讚・般舟讚・往生要集・選択集

以上の二十二聖教を予定していますが、このうち、太字の聖教は本願寺から刊行される聖典としては、はじめての収録となります。

このうち「異訳大経」というのは、「大経の異訳」という意味ですが、「異訳」

佛說阿彌陀經重編釋經撰過度經卷三 字
 佛在羅閱城者闍崛山中時有摩訶
 比丘僧萬二千人皆淨潔一種類皆
 阿羅漢賢者拘那含者拔智致賢者
 摩訶那由那賢者舍利弗賢者須彌目
 賢者維末私賢者不迦賢者迦為拔私
 賢者憂為迦葉賢者都羅迦葉賢者
 都羅迦葉賢者舍利弗賢者摩訶目
 捷連賢者摩訶迦葉賢者摩訶迦葉
 延賢者摩訶揭提賢者摩訶拘私賢
 者摩訶訶提賢者那提文陀弗賢者
 阿難律賢者難提賢者脫脚私賢者
 須私賢者摩訶賢者摩訶羅提賢者
 摩訶波羅延賢者波鳩盃賢者難持
 賢者滿瓶盃賢者茶揭賢者屬越如
 是諸比丘僧甚衆多數千億萬人衆
 諸善薩阿羅漢無失數不可復計都
 共大會坐皆賢者也時佛坐息思念
 正道面有九色光數千百變光色甚
 大明阿難即起更被袈裟前以頭面
 着佛足即長跪叉手問佛言今日佛

高麗版大藏經所収「大阿彌陀經」

とは何を指すのでしょうか。インドに起こった仏教の教えは、經典とともに広く伝わっていきます。インドより中国に入りますと、經典はインドの言葉から中国の言葉に翻訳されます。中国では漢字をもちいて翻訳され、これを今日の私たちは拝読しているのです。この翻訳は、一つの經典に対して一度だけではなく、時

代や翻訳者を変えて複数回行われていす。浄土三部經の一つであります『無量壽經』は、古来「五存七欠」といわれ、十二訳があつたと伝えられています。しかし、今日では『無量壽經』のほか現存しているものは四訳です。その四訳を『異訳大經』として、三經七祖篇では収録します。内容をみますと、願文の数などに大きな相違があることから、『無量壽經』との比較は重要ですし、親鸞聖人自身が異訳大經を諸処に引用されていることからその関係性も注目されるところです。

また、同じように異訳小經としてあげられるのが『稱讚淨土經』で、正式には『稱讚淨土仏撰受經』といい、『小經』の六方段が十方四十二仏となっていることが大きな特徴です。

そして、七祖ではじめて収録される聖教としては『略論安樂淨土義』が挙げられます。著者についてはいまだ議論があり、定説をみませんが、親鸞聖人が編集されたといわれる法然聖人の法語録で

ある『西方指南抄』には「往生論の註」また「略論安樂淨土義」等の文造也」と曇鸞大師の著作として挙げられていますし、存覚上人の『浄土真要鈔』にも引用されるなど大切にされてきた聖教です。以上が②「新たに異訳の大經と小經、略論が編入」という特徴です。

3 「三經七祖篇」の本文の特徴

◆これまでの聖典の本文

当研究所へ聖典編纂でこれまで編纂してきた「原典版聖典」や「原典版聖典（七祖篇）」は、「註釈版聖典」や「現代語版聖典」を編纂するための「基礎」となる聖典です。ですから、本文においては底本（活字化するための元になる本）となる原本に忠実に翻刻されていることが特徴といえます。例えば『觀經疏』なら、原文は漢文体で白文（読むための訓点がない状態）ですから、そのままに漢文体で活字化し、必要最小限となる返点のみを付してきました。

◆「三経七祖篇」の本文の工夫

今回の「三経七祖篇」では、これまでの聖典の編纂方針を鑑みて、本文についてはこれまで通り底本に忠実な翻刻を指しており、その上で読解に配慮したさまざまな工夫を施します。原本の本文が漢文である經典やインド・中国撰述の聖教には、返点や送り仮名を付し、さらに読解が困難と思われる語句には読み仮名も付します。また、日本の祖師方の聖教については、原本に従い返点・送り仮名・読み仮名のほかに本文の左に示された左訓（語意・訓読み）も翻刻します。そして、「註釈版聖典（七祖篇）」のように、句読点を付し、書物名には「（二重括弧）」を、引用文には「（カギ括弧）」をそれぞれ付します。とくに書物名については、原本では「経言」などと名称を出

されないことや異称を用いられることもあるため「○○経○○品」などの註釈を入れます。

つまり、これまでの「原典版聖典」シリーズでは、原本に忠実に翻刻することを基本方針としていましたが、「聖典全書」では、この基本方針に加えて拝読とともに読解できる聖典ということ念頭において翻刻の措置を講じているのです。これが④「読解の便を重視（テキストの保持）」という特徴です。

4 おわりに

以上、今回は「聖典全書」「三経七祖篇」の特徴のうち、とくに収録聖教と本文の表記について、これまでの聖典と比較した上でみてきました。読解の便についての工夫は、今回ご紹介できなかったものも多くありますが、また機会をあらためてご紹介できればと思います。

（総合研究所）

親鸞聖人750回大遠忌
宗門長期振興計画

【基本的な考え方（コンセプト）】

- 『新たな始まり』
～明日の宗門の基盤作り～

【目標】

- 親鸞聖人750回大遠忌法要の修行
- 現代社会に応える教学・伝道態勢の構築とみ教えに生きる「人」の育成

【重点項目】

- ①法要の修行
- ②記念行事等の推進
- ③協賛行事
- ④伝道態勢の整備

⑤時代に即応する教学の振興

- ⑥新たな門徒の誕生（教線の拡充）
- ⑦国際伝道の推進
- ⑧寺院の活性化対策
- ⑨過疎・過密対策
- ⑩地域社会との交流
- ⑪現代社会への貢献
- ⑫人材育成の新規対策
- ⑬既存の人材育成施策の強化
- ⑭宗務機能の点検と拡充
- ⑮境内地等の整備